

春のFDワークショップ 議事録

2021年6月30日

蚊野 浩

春のFDワークショップを、6月30日、13:15から14:30に、Teams会議にて実施した。

参加者：22名、荻原、中島、宮森、河合、荻野、安田、玉田、田中、奥田、伊藤（慎）、吉村、赤岩、林原、棟方、小林（聡）、井上、平井、秋山、永谷、大本、水口、蚊野

司会：蚊野

アジェンダ：

- (1) 情報理工学部の完成年度を迎え、学部カリキュラムとコース制を検証するための学部委員会の設立に関する議論。
- (2) 留年率改善の方策提案と、これにリンクした寺子屋などの修学支援の運用に関する議論。
- (3) 学部教育カリキュラムの有効性の状況把握と改善に関する議論。

1. コース制の検証委員会について

奥田先生を中心に、平井先生が補佐する形で検証を進めていただく形です承された。検証する内容については、今後、具体化していく。本日の議論の中では、以下のような話が上っていた。

学生が選択したコースと就職先についてまとまった情報がいただけると良い（永谷先生）。コースの増減やコースごとの必修単位の選択について検証する。人数制限があるコースについて検証する。例えば、セキュリティコースについて、コースの趣旨を理解せずに選択している学生が存在する、であるとか、ファブコースについて適当に授業をつまみ食いして、コース替えする学生が存在する、などがあった（平井先生）。

秋のFDワークショップで何らかの報告を予定している（奥田先生）。

2. 留年率改善の方策などについての議論

司会から事前の配布資料について説明し、概ね、これに沿って議論した。特に、留年率を改善することについて、いろいろな意見をいただいた。寺子屋に関して述べるならば、現在の運用では低単位学生が利用する可能性はほとんどない。抜本的な対策が必要である。対策の一例は、正規授業で落単候補になった学生に対して、寺子屋で補習、あるいは、再試験を行い救うという提案があった。また、他大学の状況を調査し、参考にすべきである（林原先生）。

4年留年率を改善する方策と、5年以上の留年生を減少させる方策を分けて考えるのが良いと思うが、4年留年率の改善に関しては、生命科学部は留年率を10%台にキープしている。生命科学の方法を参考にしてはどうか？という意見があった（中島先生）。総合生命は担任制のようなシステムで留年率を抑えることができているという印象がある。詳細は、別途、調査する必要がある。5年以上の留年生を減少させるためには、成績評価をダブルスタンダードで行うことが必要と想定される（大本先生）。そのようなことが許容されるのであろうか？

3. 学部カリキュラムの状況把握と改善に関する議論

司会から、プログラム系授業（特に基礎プロIとII）のリソース再配分を、プログラム系教員を中心に進めていただくことについて意見を求めた。安田先生からは、学部カリキュラム委員会などの学部全体のカリキュラム設計を担当する部署が担当するのが適当との意見があった。リソース配分の再検討については肯定的な意見もあったが、明確な方向性を出すことはできなかった。

これ以外については、特段の議論はなかった。